

還暦、また一旦 60 歳定年という時期を迎えた際の

謝辞

2025 年 1 月 19 日

(2022 年 5 月 30 日作成)

M.Fujii

謝辞の文

この 5 月で還暦、そして一旦 60 歳定年という時期に温かい言葉など頂戴したりしており、感謝いたします。そして、感激しております。

暦の干支は 60 年で一周することから、生まれてから 60 歳を迎えたところで一回りし、生まれた年に戻ると言われ、赤ちゃんに還るという意味から「還暦＝赤色」とテーマカラーが定着しています。また、還暦を祝うテーマカラーの赤色には、魔除けや厄除けの意味があるとされています。赤ちゃんに還るという意味では、折り返し地点と言うよりも、第二の生まれ変わりのようにも感じられます。私はこの 5 月で還暦、そして一旦 60 歳定年ですが、次の還暦（120 歳）を目指す所存です。

私の 60 年の人生を振り返りますと、普通と同じく会社中心の生活でございました。長い会社員生活の中では、失敗も小さな成功も、皆様にご迷惑をお掛けしたことも多々ございましたが、社会人生活スタート以来 36 年、曲がりなりにも勤め続けることが出来、清々しい気持ちで一杯です。そして、興味が覚えたところにだけ非常に細かく対処し、相手にしたら面倒で一種ラディカルな私が一人前の会社員としてやってこれたのも、ひとえに皆様のご支援、ご尽力の賜物と感謝の念で一杯です。

まだまだ気力、体力は若い人に負けないと自負しております。結石持ちで左腰の神経を痛めている私ですが、幸いなことにまだ老眼になっておらず、IQも維持しております。上半身は現在も発展途上です。ただし、今後は左腰付近より下の部分の体調管理にも努めていきます。

会社員として第二の人生（最大5年間）、また二足の草鞋の片方の学究生活をはじめ、次の還暦目指す気持ちで、これからも様々な事に取り組んでいく所存であります。現在4つの学会の正会員ですが、研究者としても社会貢献出来るよう努力したいと思います。

私のこここのところの好きな言葉や詩を挙げておきます。過激なので解釈を誤らないようにご注意下さい。

I. 「凡人は、概して、自分の能力を超えることをすべて断罪する」

（ラ・ロシュフコー）

* ラ・ロシュフコーが言っていることは、さすがに皮肉の達人のフランス貴族・文学者ですから、解釈に一捻り必要です。

私たちは、よく分からないこと、自身の理解度を越えたことがらや考えを「分からないのは説明が悪いからだ、仲間の気持ちが分かっていない」と否定しがちになりますが、それをしてはいけない、ということです。

私が学究生活を通じ感じているのは、学者や研究者に自分の能力を超える言葉や学説、研究をすべて断罪する人は少ないということです。すごい研究者を前にしたとき理解できない悔しさのある学者や研究者も多いと思いますが、私が見ていて非常に紳士が多いという印象です。凡人であるからこそ、少なくとも自分の能力を超えたところに対して、尊敬の念を持ち続けたいというのが、現在の私の気持ちです。

II. 囚中の作 書き下し文

高杉東行（晋作）

君見ずや死して忠鬼と為る管相公 きみみずやししてちゅうきとなる かんしょうこう

靈魂尚在り天拝の峰に れいこんなおあり てんばいのみねに

又見ずや石を懷いて流れに投ずる楚の屈平　またみずやいしをいだいてながれ
にとりずる　そのくつべい

今に至るまで人は悲しむ汨羅の江　いまにいたるまでひとはかなしむ　べきらのこう

古自り讒間忠節を害し　いにしえよりざんかん　ちゅうせつをがいにし

忠臣君を思うて躬を懷わず　ちゅうしんきみをおもて　みをおもわず

我も亦貶謫幽囚の士　われもまたへんたく　ゆうしゅうのし

二公を憶い起こして涙胸を沾す　にこうをおもいおこして　なみだむねをうるおす

恨むことを休めよ空しく讒間の為に死するを　うらむことをやめよむなしく　ざんか
んのためにしするを

自ずから後世議論の公なる有らん　おのずからこうせいぎろんの　こうなるあらん

あなた方は知っているでしょう。死んでもなお忠誠を貫いて神となった菅原道真公、その魂が今なお天拝山にあるということ。
またやはり知っているでしょう。国を憂いて石を抱いて流れに身を沈めた楚の屈原、今に至るまで人々がその汨羅の淵であった忠義な出来事を悲しんでいることを。
昔から告げ口を言って人をおとしめることが忠節の士を不幸にしてきたし、忠義深い者は国や主君のことは思っても自分自身のことは思わないものだ。
私もまた二人と同じように罪人として流され、囚われて閉じ込められた身の上なので、二人のことを思い起こすと涙が胸を濡(ぬ)らすのである。
讒言によって空しく死んでいくことを恨まないようにしてほしい。
自然の成り行きとして、後世に自分の忠誠心は、きっと公けな議論となるであろう。

- * 管相公は菅原道真のこと。また、楚の屈平は楚の国の官僚であり、左遷され官僚を辞した後、汨羅に身を投じ自殺した屈原（くつげん）のことです。彼らの晩年は非常に恵まれないものとなった感が強いですが、そうした国やまわりの人を思い、悩んだ彼ら先人の気持ちの一端をくみ取って生きていきたい気持ちにさせてくれる詩です。それが後世に生きる私たちが汲み取るべきものと考えます。

ちなみに、屈原を想って汨羅に“ちまき”を投げる習慣が端午の節句の習慣となりました。（株式会社虎屋-とらやの和菓子説明書きにもこの話は出てきます。）

60 歳分の思いを出来る限り短く書こうと思いましたが、案外長くなってしまいました。

皆様、誠にありがとうございました。

これからも頑張りますので、よろしくお願いいたします。

以上